

## 幼稚園創立90周年の年にあたって

### 昔の幼稚園の思い出

和田トヨ

表題によって何かを書くようにというお話を頂きました時は、お受けしようかどうかと迷いましたが、遠い過ぎたことを思い起してお話することが、今のこのうるおいの少ない競争意識旺盛な世の中で、幼い人の教育に当られる若い方たちに、何か心のやすらぎを感じて頂ければ、年寄の昔話も無駄にはならないでしょうと存じ、ボツボツ話すことを、代って書いて貰うことに致しました。と申しますのは私、昨春秋以来年のせいで、少々手足が不自由になりまして、こまかい字が書けなくなりました。と同時に記憶も不確実だったり、話し方などもおわかりにくいことがあると思いますのであらかじめ御了承頂きたいと思います。

さて、幼稚園創設九十周年と申すことは、我国で幼稚園がおよそ一世紀の歴史を残したということです。その最初の頃に幼稚園に通われた方は今も御在世ならそれこそ百才にお近いことでしょう。そのことに比べますと私共の目白幼稚園はまだまだ若い方で、昨年やつと五十周年を迎えたばかりです。創立に当りまし

ては、当時お茶の水におりました園長（主人―以上園長）が、自分の健康上のこともありましたが、どうしても官学から離れて自分の力で理想の教育をしたいという念願から始めましたので、無資産の者が大それた考えのようでしたが、坪二銭の土地を借り、大正博覧会の事務室の一部を五十円で払下げを受けて大正四年の秋建て始め、屋根ができた時台風で屋根全部吹き飛ばされるといふ一幕もあって、やつと大正五年一月開園の運びとなりました。

当時、幼稚園に子女を通わせる家庭は中流以上の家庭で、今程に普遍的ではありませんでした。最初の年は、宮内省へおつとめの方、お医者さま、大地主さんのお子さんたちでただの三人、このお子たちが三ヶ月で卒業したあと四月からは十人位、後、年々少しずつふえ、昭和の初年頃までは三〇四十人位が普通で少人数の行届いた保育ができました。現在の最初からマンモスの幼稚園を計画され実施しておられる方々には想像もおつきにならないことと思います。距離的には勿論全部歩いて通うお子さんたちです

が、幼稚園を中心に円を描くとその半径が現在の約三倍〜三倍半位の大きさになります。それ位遠くから皆毎日つき添いがついて殆ど休むことはなく、かよったように思います。

保育方針は当時も今も殆ど変わりません。昨今大変新しいことのように殊更に叫ばれてきていることは、創立当初の五十年前前から園長が行なっていたことで、その五十年の間には、いろいろの意見や学説もあつたようですが、私共では一貫して子どもを楽しく、充分に遊ばせながら心身の発達の手助けをし、個々に躰をするということに徹してまいりました。躰は叱つてするのではなく、先生が身を以つてお手本を示すという方針です。その為か開園以来今日に至るまで、幼稚園がいやになつてやめたというお子さんは一人もおりません。戦時中は幼稚園にも随分軍部、政府の圧力が加えられましたが園長は一向意に介せず、この子どもたちが大きくなる頃には戦争は無くなる、子どもに戦争は関係ないという意見で、戦争ということを取りたてて話もしなければ、また特にかくすということもなく平静に保育を致しました。それでも通園途次は防空頭巾をかぶったり、警報に対する訓練などは生活訓練として自然に知る機会があるわけです。何事も自然に無理のないようにということでした。

創立当初は、洋服を着ている子どももさんは殆どなく、男の子は紺紺の着物に羽織、女の子はお被布ヒツを着て可愛かつたものです。一時白いエプロンが流行して肩から吊る白いエプロンをかけ

るお子さんがたくさんあつた時もあり、大正末期頃からだんだん洋服になりました。保育室は床全体にゴザを敷き(当時は百貨店の三越も床は全部ゴザと絨毯が敷いてあつて、靴の人は靴カバーをかけて貰い、下駄の人は草履にはきかえたものです)机は最初から六人掛の机と椅子で、遊戯室は、一方の壁は全部子どもの高さの黒板、一方の壁は大きな一つの額になつて、ある時は先生が季節によつて絵や工作でその額をうずめたり、またある時は子どもの共同製作を飾る場所に使つたり、時には専門の画家さんに描いて頂いたこともありました。

おもちゃは充分に与えなければいけないという園長の特論のもとに、積木、色板、糸通し、箸輪、組織などの恩物やままごと、おてだま、人形などを充分に用意しましたが、後には机の上の恩物の積木のほかに長さ一米のもの、その $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{8}$ 、更にその三角にしたものなどの大きな積木をたくさん用意し、子どもたちはそれを全身で積んで遊ぶのが何より楽しいことの方でした。

また粘土細工、豆細工もよくしましたが、粘土は今のような油粘土ではないので、大きな瓶に土の粘土を一杯入れて置き、堅く固まっているのを、使う二、三日前から水を適当に入れて、軟かくしてたびたび様子を見ては、ぬれ布巾をかけて使う時までちよつとよい堅きになつてするように用意したものです。豆細工もやはり前日から用意するものの一つです。この豆細工は最近殆ど見られなくなり、一時きび殻を切つて豆の代りに使うことをしま

した。この場合は、豆と違ってきび殻の長さを自由に切って変えられるので、子どもそれぞれの工夫によって出来るものの種類も多く、変化もあり色彩にも富んでいました。しかしこれも近頃あまり使われていないようです。

戸外遊びは最も子どもの喜びことで、できるだけ外で遊ぶことを奨励することは今も変わらないことです。大きな砂場、竹で組んだ杵登り(ジャングルジム)、ブランコ、二人乗りブランコ、遊動円木(これはあぶないので後に固定させ平均台のような遊び方に替えた)なども今と大して変わりませんが、現在の私共の所は、戦後復興後は学校と一緒にです。ことに手狭で、幼稚園の遊び場が不自由で、子どもたちがかわいそうです。昔は同じ場所でも、築山あり池あり、池の中の金魚は自然に冬を越し、四季折々の草花や植木が花もつければ実もなるといふ環境でした。小さな築山でも、おにごっこにかけ登ってはかけ下り、追いかけてと変化があり、またたくさんあるつつじの株のかけはそれぞれかくれんぼうの屈強の場所というわけで木をいためるなどということはめったにありませんでした。キレイに咲いている築山のつつじの蔭や、藤色の房の長々と下った藤棚の下、よく茂った生垣に添って咲きみだれる山吹のそばなどに子どもたちの笑顔が三三五五重なり合っている風景は、私共目白幼稚園だけでなく最近の都内の幼稚園ではあまり見られないのではないのでしょうか。今昔の感一入といふところですが、時代のせいとばかりいい切れず心痛めて

おります。総じて子どもの遊びは昔も今もそう大して変わりません。幾分科学的になったこと、テレビの影響で一般に理屈っぽく物識りになったということでしょう。天真爛漫という子どもらしさを保つ期間がだんだん乳児期に近い方にせばめられて行くように思われます。

おべんどうについては、今ではどの幼稚園でもしていらっしやるでしょうし、またそれぞれの工夫もなさっていることと思いますが、私共では昔からおべんどうの時は、レコードをかけて名曲を聴かせておりました。その頃のブレイヤーはゼンマイ仕掛けの小廻しの蓄音機で大きいラッパがついておりました。

おもちゃのことで、私どもが初めて飯田町に世帯を持った頃(明治三十八年)、高市次郎さんが九段の中頃に玩具のお店を出しておられました。高市さんはもともと、教育畑の方ですし、園長もまだその頃はお茶の水にとめており、お互に意気投合し教育玩具の改善研究ということで毎日のように高市さんが家にこられ食事を共にしながら恩物の研究やら幼児に与える玩具の研究に余念ない有様で間もなくフレイベル館を始められたのです。高市さんは後にヨーロッパへも再々行かれ、フレイベルを詳しく研究され益々斯界に貢献されたことはフレイベル館の名が全国の保育関係者の間に広く親しまれていることでもおわかりのことと思えます。昭和六年に私共が下落合に保母養成所(現東京教育専修学校)と第二目白幼稚園を設立しました時には、フレイベル館つまり

高市さんが、机、椅子、黒板など、中の設備を御寄贈下さり随分お力添えを頂きました。然し戦争が次第にはげしくなった頃、高市さんはフレイベル館を人に譲って郷里に引込んでしまわれ、私共も学校も幼稚園も焼けてしまいました。戦後大分経ってから高市さんは再び上京されチャイルド社を設立されましたが、もう大分お年を召しておられ、昔程の意慾はみられませんでした。園長が亡くなりました時には昔の追憶談をなつかしそうにして下さいましたが、今はその高市さんも故人になりました。

高市さんのお話で忘れてはならないのがキンダーブックです。幼児の生活に大きな役割をする絵本について、当時市販に出ているものには、真に幼児を理解して書かれているものは殆ど無いといってもよい状態でした。それで園長が高市さんに相談し、園長の指導によって観察絵本としてのキンダーブックが生まれたのです。当時の吉沢廉三郎先生や、武井武雄先生がいまだにお描きになつていらっしゃるキンダーブックはフレイベル館のトレードマークのようになつかしいものです。

園長がまだお茶の水におりました頃、長男がお茶の水の幼稚園に通つておりましたので保育実習科の生徒さんたちが名前を間違えて長男を「みのるさん、みのるさん」と呼びなされると、長男は「みのるはお父さん、僕はみちお」という会話が何度も繰り返されたらと、その頃実習しておられ今は故人になられた坂内ミツ先生がよく話して下さいました。坂内先生はお茶の水本科の理科出身

の方でしたが、幼稚園での実習以来のおつき合いで、ずっと幼児教育にたずさわられ一生を終えられた立派な先生でした。次男が幼稚園に入る頃から目白幼稚園ができましたので、次男も次女も目白幼稚園でした。朝おべんとう持って出て、幼稚園が退けてもお迎えがこないし、おとなしく遊んでいるので他の先生が「おうちはどこですか。お迎えはいらっしゃらないの？」と聞いてもだまっているので不思議に思っていたら園長の子どもだったという話もあります。

割に近い話では、確か支那事変が始まってからのことですから、昭和十二年か十三年のことです。東京で世界教育会議が開かれ、日本では初めての催しで上は大学から下は幼稚園までの世界各国の教育者が東京に集まった時幼稚園からは園長が選ばれて、私も一緒に出席しました。通訳は彰栄の石原先生がして下さいたと覚えていますが、倉橋先生も御一緒だったかとも思いますし、また園長一人だったのかその辺のところは覚えておりません。世界各国の関係者の中で、印度の御婦人方が特に印象に残っているのはどういうわけでしょう。また芝の藤山雷太さんのお邸に全員招待されましたが、純日本の建築、庭園、茶席は勿論、田舎家まであったのを覚えています。とに角戦争で記録を全部焼けてしまいましたので、公のことではっきり覚えているものが少なくて残念です。お約束の紙数を超えました。また機会がありましたら想い出して置いてお話致します。よう。(目白幼稚園・東京教育専修学校)